

〔研究ノート〕

## 「市民的」ボランティア観の構築のために －大学生がもつ「市民」のイメージをもとに－

千葉 たか子<sup>1)</sup>

### Rebuilding Concept of Volunteers Applicable to Contemporary Times － University Students' Images of 'Citizens' －

Takako Chiba<sup>1)</sup>

#### Abstract

This paper discusses the concept of 'citizens' with special reference to university students' images of 'citizens,' in the hope of rebuilding concept of volunteerism and voluntary activities which suit to contemporary times.

In my discussion, I refer to the concept of 'citizens' already defined and present my concept of 'citizens,' as persons who are independent and recognise social issues as their own, and as persons who are empowered to challenge and solve these issues. In other words, 'citizens' are conscientious individuals.

My research on university students' images of 'citizens' show that many of them simply take 'citizens' to mean 'residents of a city.' Some students wrote that 'citizens' are persons who contribute to community building. They never refer to the ancient Greece nor to the capitalist class, which are the term's basic definitions.

Some people have been asserting that society has been moving towards a lessening of social cohesion, and insist that something should be done to remedy the current situation for a change for the better. Volunteerism and voluntary activities could be one of the alternatives in response to this expectation. Volunteers are 'citizens' who engender the dynamic of social change.

(J.Aomori Univ. Health Welf. 11 : 77 - 86, 2010)

キーワード：「市民」の定義・概念、ボランティア、大学生の「市民」観

Key Words : concept of citizens, volunteers, university students' views of citizens

#### 要旨

本研究は、ボランティアを社会の変革を促す力（ダイナミズム）として位置づけようとする「市民的」ボランティア観へのパラダイム転換を考察するものである。本稿では特に、「新しい市民社会」を創造する「市民の活動」としてのボランティア、「市民的」ボランティア観の形成を視野に、「市民」及び大学生の「市民」観について考察する。

世紀が変わり、社会状況も激変している。近代資本主義の「行き過ぎた」進化と発展、そして格差拡大など社会の不安定要素の増加を指摘し、このままでは社会が破綻しかねないと危惧する社会学者も少なくない。筆者は、このような状況に鑑み、現代社会の閉塞状況を穿つ存在としてボランティアを位置づけようとする視点を提示してきた。しかし、若い世代（高校生と大学生）の意識調査の結果をみる限り、このパラダイム転換にはかなりの時間を要する状況が明らかにされている（千葉たか子

---

1) 青森県立保健大学健康科学部社会福祉学科

Department of Social Welfare, Faculty of Health Sciences, Aomori University of Health and Welfare

2009)。

このような背景をもとに、本研究ではまず、「市民」について、社会学からの定義・概念、および日本における市民運動の先駆けとされる小田実の「市民」観を検討する。そして、本稿の「市民」の定義すなわち「自分の足で立ち、自分の足元の問題を真剣に考え、自分の感覚を大切に、当事者意識で考え行動する人々、今日的な表現をとると、『政治的にリテラシーでありエンパワーメント』した主体的存在」を提示する。

次に、大学生の持つ「市民」の定義・概念あるいは理解についての記述調査をもとに分析・考察を行う。調査で明らかになったのは、大学生の場合、「市民」についての理解が充分ではないことである。彼らが示した「市民」は、第一に「市に住む人」で次が「地域社会づくりに参加する／担う人々」という極めて限定的なものであった。「市民」を地域社会の再構築に関わる存在としての人々という位置づけは妥当なものである。しかし、地域社会の再構築には、制度・政策のおおもとである国や地方行政組織との関わりを無視しては成り立たない。「そこに住む人」というだけでは単純すぎるだろう。「市民」は、歴史的・政治的・経済的な背景をもつ概念である。学習による知識とともにその知識を活用して、社会理解を深める姿勢が求められる。この意味で、学生の社会を見る目を育てることの重要性が再認識されたことになる。

## はじめに

1995年の阪神淡路大震災を契機に、ボランティア（活動）<sup>1</sup>が日本の社会に根付いてきている。しかし、そのボランティア活動のもとになっているボランティア観は、「見返りを求めず、人のため、自発的に行動する人（活動）」という、いわば「個人発の美しい行為」という段階にとどまっている。

世紀が変わり、社会状況も激変している。近代資本主義の「行き過ぎた」進化と発展、そして格差拡大など社会の不安定要素の増加を指摘し（橋本健二 2009）、このままでは社会が破綻しかねないと危惧する社会学者も少なくない。このような状況に鑑み、現代社会の閉塞状況を穿つ存在としてボランティアを位置づけようとする視点の提示がある。すなわち、「古典的」<sup>2</sup>ボランティア観から「市民（「市民」については第1章第2節で議論する）的」ボランティア観へのパラダイム転換である。「古典的」ボランティア観とは、「自発性・自主性」「無償性」「公共性・公益性」のようなキーワードでボランティアを捉えようとするものであり、「市民的」ボランティア観とは、「市民」「変革」「新たな」のようなキーワードで捉えようとするものである。すなわち、「市民的」ボランティア観とは、ボランティアを社会の変革を促す力（ダイナミズム）として位置づけようとする視点である。しかし、若い世代（高校生と大学生）の意識調査の結果をみる限り、ボランティアを「市民的」ボランティア観の段階で捉えているものは極めて少数で、「古典的」ボランティア観の段階に留まっていることが示されている（千葉たか子 2009）。ただ、ボランティア観のパラダイム転換、それにはまだ時間がかかるとしても、転換が遅々としてつつも着実に進行している様子がかがえた（千葉たか子 2009）。その背景には、ボランティア教育<sup>3</sup>が大きく作用

していると考えられる。

本研究では、以上のような問題意識に基づき、「新しい市民社会」を創造する「市民の活動」としてのボランティア、「市民的」ボランティア観の形成を視野に、大学生の「市民」観について考察するものである。

## 第1章 ボランティア観の再構築

ボランティア研究においては、ボランティアの実践研究と理論的研究との2つの領域がありうる<sup>4</sup>。実践研究の多くは、論述する語彙を定義することなく、言説状況を引き継いだ形で書き進められていることが多い。また、理論的研究そのものが少ない現状であるが、理論的研究においても、重要な語彙においてもそれらの定義や概念を綿密に論じているものは少ない。ボランティアを市民あるいは市民社会とつなげて議論する研究においても、「ボランティア」や「市民」の語彙についての定義や概念を厳密に論じている研究も少ない<sup>5</sup>。その少ない理由の一つには、20世紀末から21世紀にかけて生活している日本人に視点を当てる限り、日本社会は日本に住むすべての人々にとって公正<sup>6</sup>な社会であるという根拠のない前提を、暗黙の了解のままに受けとめて議論しているからではないか。現在の日本社会はその前提を覆そうとしている。二つには、ボランティア論を展開する際、ボランティアが活発になった「現在」の時点で議論しているという前提があるのだろう。したがって、市民について議論する場合、日本人は皆、日本国憲法に述べられた国民であり、「国民＝市民」としての理解が先行していると解釈できる。しかし、ボランティアが、動員型のボランティア、あるいは地方行政の下請けとしての役割を担っていると指摘もある（中野敏男 1999；佐野章二 1999）。

以上のような背景をもとに、ボランティアを行う「市民」についてはあらためての議論を要するものとする。

### 第1節 ボランティア観のパラダイム転換

先年、「ボランティア観のパラダイム転換」をテーマに、「古典的」ボランティア観から「市民的」ボランティア観への変化は、その質的相違において、パラダイム転換とみなされるものとし、その必要性と転換の可能性について論じた（千葉たか子 2009）。

「古典的」ボランティア観とは、ボランティアを「自発性・自主性」「無償性」「公共性・公益性」というキーワードで捉え、「個人発の美しい行為」とする視点である。このような視点で論じている例として、入江幸男(1999)、吉村恭二(1999)、遠藤克弥(2004)を挙げた。「自発性・自主性」「無償性」「公共性・公益性」の他に、ボランティアのキーワードとして、「創造性、先駆性、発見性、相互性、ネットワーク、継続性、専門性」を理想条件としてあげたり（入江幸男 1999:6）、「先駆性」や「創造性」を理想条件としたりする考え方（吉村恭二 1999:38）もある。いずれも個人の内面性を重視する「個人発」の行動とする視点である。このような視点でボランティアを捉える研究者は他にも少なくない。徳久球雄(1997)は、ボランティアを「さまざまな社会的危機や課題に身を挺し、自分の財源・時間を投じて（下線は筆者による）行動し、明るい、住みよい、生きがいのある社会を生み出す人たちである」とする（徳久球雄 1997: 16）<sup>1)</sup>。また、田尾雅夫(2001)は、ボランティアの利他性を「極端に言えば、自分を犠牲にしても（下線は筆者による）他のために尽くしたい、また、捧げたいという気持ちである」（田尾雅夫 2001:25）<sup>2)</sup>と述べている。地域社会づくりあるいは社会の変革を目指すような活動は多くの場合、時間がかかるものである。自己犠牲を求めるような活動を長期に渡って継続することには大きな困難が伴うと推測される。このような視点はボランティア活動を実践するあるいはしようとする者に対する要求としては高すぎ、「身を賭してこそ美しい」とする旧弊な価値観を想起させる。

一方、「市民的」ボランティア観とは、ボランティアを「市民・変革・新たな」というキーワードで捉えようとするものである。このような視点を提示した例として、金子郁容(1992)、中村尚司(1994)、上野千鶴子(1986)、佐藤慶幸(2008)を挙げた<sup>7)</sup>。これらの研究者は、ボランティアを「個人発の美しい行為」という動機すなわち個人の内面の問題とするのではなく、社会においてボランティアが果たす機能という点に着目している。ここに大きな違いがある。

金子郁容は、「ボランティアは社会の閉塞状況を打破

するための一つの「窓」である」（金子郁容 1992:70）<sup>3)</sup>という。中村尚司は、「ボランティアとは、多元・多重の活動を引き受ける人である」（中村尚司 1994:173）<sup>4)</sup>という。中村尚司の「多元・多重の活動」とは、単一の生活の「場」に人々を押し込めてきた分断化に対して、人々をいくつもの生活の「場」に戻そうという提言である。上野千鶴子はボランティアについて直接的に述べているわけではない。しかし、人が生活していく際、一つの生活圏に限定されず、いくつもの生活圏に属して参加していくことが重要と述べ、そこが中村尚司と共通する。

人々をいくつもの「場」に戻すこと、それは実は人が住む社会・地域づくりに関わることであり、かかる存在としてのボランティアの機能を重視するものである。このようなボランティア観を論じる前提には、資本主義経済体制という巨大な管理システムの中で、近代以前にみられたような相互依存のありかたが大きく変化し、人と人の関係性が希薄になり、閉塞状況が生じていることへの危機感がある。資本主義は本質的に分業を促進する。この分業体制は、効率的に進めることを目的に、人が住む生活圏を分断する方向で機能した。このことが、現在の地域社会の崩壊を促進した事は、否定できない。

新たなボランティア観は、本来様々な「場」で生活する人々が、労働を分断され（分業化）、単一の生活の「場」に押し込める（生活の場の分業化）ように進んできた資本主義経済体制への批判である。それはまた、人々を生活の主体者（当事者）とする主張である。ボランティアは、人々の生活の場を広げ、破壊されてきた地域社会の再構築の可能性をもつものとして期待されているのである。ボランティアの特性は、「自発性・無償性・公益性」というキーワードで捉えられよう。しかし、社会的な位置づけは、その段階に留まるものではない。新しい世紀を展望する「市民社会づくり、そこへの参加」に位置づけられるものであろう。簡明にいうならば、ボランティア活動は、人が人らしく生きていくことのできる新しい社会を作り出す「市民の活動」であろう。

### 第2節「市民」の定義・概念<sup>8)</sup>

前節では、ボランティアの根源的な機能は、人が人らしく生きていくことのできる新しい社会を作り出すことであり、ボランティアとはそのような社会を作り出す人々であり、そのような人々が「市民」であるとした。では、「市民」とはどのような人々なのか。本節ではその定義・概念について改めて議論を重ねたい。

#### 1. 市民の歴史的な概念

市民ということばが、世界史に初めて登場したのは、古代アテネの市民国家においてとされる。次ぎに、市民

が現れるのは、中世である。

田中義久（1994）は、市民について次のように説明している。

「身分」としての市民と「階級」としての市民＝市民階級という二つの側面がある。「身分」としての市民は、基本的に、ヨーロッパの中世都市における都市共同体の身分的特権をもった人々を意味する。（中略）これに対して、「階級」としての市民は、（中略）、「ブルジョワジー」である。

（田中義久 1994: 384）<sup>5)</sup>

中世都市の市民身分は、自由民という身分であり、その身分は獲得できるものであった。すなわち自由民という身分を有しない人々（隷農）もいて、今日普遍的に受けとめられているように「全ての人々」を意味しない。

また、近代的市民とは、市民階級と呼ばれる近代社会の階級であるが、この場合には、資本家階級（ブルジョワジー）と同義に用いられる。ブルジョワジーは以下のように説明される。

市場において自己の労働と財産を自律的に利用しうる「営業の自由」の担い手（有産階級＝ブルジョワ）であるという経済的資格、共同体の意思決定に参加しうる参政権の担い手である（国家市民あるいはシトワイヤン）という政治的資格、「財産と教養」に裏づけられた一定の生活様式の担い手（市民的中間層）という社会的資格をもつ。現代的意味での市民は、これら三つの資格の他に、普通選挙権、産業的市民権、社会権といった権利をもち、国民的社会のなかで完全なメンバーとして活動することが可能となって人々である。

厚東洋輔（1993: 586）<sup>6)</sup>

市民階級を資本家階級と同義とすれば、資本家階級の対極にある労働者は市民に含まれず、「全ての人々」を意味するものではない。

また、市民社会とは市民が支配階級となる社会であるが、この市民社会は、市民革命を経て成立するとされる。しかし、市民革命の代表とされるフランス革命は、女性を2級市民として排除するものであった。フランス革命をジェンダーの視点からみるならば、女性が市民の枠から排除されたフランス革命を市民革命として位置づけることには批判の余地がある<sup>9)</sup>。

以上のように、市民とは歴史的な背景をもつ経済的・政治的・社会的な概念であり、（近代）国家における市民という位置づけが正統であろう。

しかし、これらのように、一部の人々あるいは一方の性が排除されるような定義や概念を、今日的な意味でのボランティア活動を考える際、使用に堪えるだろうか。また、本論で考察する市民像を明らかにするために、このように何世紀も歴史を遡る必要もないだろう。

## 2. 小田実<sup>10)</sup>の「市民」像

日本における市民や市民運動の先駆けになったのは、何といても小田実と彼の活動であろう。小田実自身、「『ベトナムに平和を！』市民連合（以降、ベ平連）が日本の社会にあった『市民』は行動しないあるいは『市民』はたたかわないという通念をかなり変えたろう」（小田実 1995:9）<sup>7)</sup>と述べ、ベ平連運動が日本の市民運動の先駆的役割を果たしたとの認識を示している。

小田実は、1970年代、ベ平連の運動を組織し、反戦運動を行なったことで著名であるが、彼はその運動の中で、市民とは何かを繰り返し問いかけている。小田実は、市民の定義を「辞書的な」形で明確に記述していない。しかし、その膨大な論述の中で、様々に議論し、様々な表現で彼が考える市民の姿を明らかにしている。例えば、1974年の著書では、「『自立する』ということばと『市民』は不可分で、『自立する市民』とは、一口に言うなら、それは自分のことは自分で決める人間である」（小田実 1974: 3）<sup>8)</sup>と述べている。同書の後半では、「私の定義する『市民』とは、（中略）、次のような原理を身につけている人物たちであるように思われる」という。「次のような原理」とは、(1) 自分のことは自分で決める、(2) 「身にしみる」こと、(3) 「身銭をきる」である（小田実 1974: 226）<sup>9)</sup>。「身にしみる」とは、自分の問題として切実に感じることである。また、1978年の著書の「変革の主体としての市民」の項でも、市民について繰り返し論じ、次のように問い掛けている。「デモ行進に参加している人々が、労働者、学生、一般市民という3つのグループに分かれている。では、労働者は市民ではないのか、学生は市民ではないのか。」あるいは、「あるグループが、ベ平連に対して、『自分たちはベ平連さんと違って、[ふつうの市民]だから』と自称することに、[ふつうの市民]とは何か」と問うている（小田実 1978: 131 - 136）<sup>10)</sup>。さらに、1995年の著書でも、ベ平連運動を回顧し、その運動に参加した人々を市民と呼び、市民の概念について数頁にわたり考察している（小田実 1995: 7 - 18）<sup>11)</sup>。そこに描かれる市民は、やはり「自分のことは自分で決める」人々である。

彼が捉える市民とは、社会の問題を自分の問題として切実に感じ、自分の頭で考え、行動することを自分で決める人となろう。そしてそのような市民が、「変革の主体としての市民」なのである。

### 3. 本稿における「市民」像

本稿における「市民」像は、小田実の語る「市民」像に極めて近い。小田実がいうこの「自分の頭で考え、行動することを自分で決める人」としての人々の姿を市民のイメージとして捉えている。社会にある課題を「自分の問題」として捉え（身にしみる主体）、自分に出来ることは何かを自分の頭で考え（考える主体）、「行動する主体」である。そして、自分の頭で考えたことと異なる状況が進行している場合、その進行の主体（多くの場合、行政や企業であることがありうる）に対し、疑問を呈し、必要ならば、反対意見を表明、批判できる人々でもある。今日的な表現をとるなら、「政治的にリテラシーでありエンパワーメント」した主体的存在である。

したがって、「市民的」ボランティアとは、考える主体としての「市民」であり、現在の閉塞した社会の「変革」を推進する／しようとする人々であり、活動の先に示されるのは「新たな」市民社会である。自分の足で立ち、自分の足元の問題を真剣に考え、自分の感覚を大切に、当事者意識で考え行動する人々である。ここに、新しい時代のボランティア（活動）を考える場合、「市民・変革・新たな」がキーワードとして浮上してくる。

#### 第3節 ボランティアのパラダイム転換に関する先行研究

前述したような背景をもとに、社会の変革を促す活動につなげるため、古典的ボランティア観から、市民的ボランティア観へのパラダイム転換がなされる必要があると考える。ではこの転換はなされるのか、あるいは現在、

このパラダイム転換が進む可能性はあるのか。

この問いについて考えるために、これからの社会を担う若い世代である高校生と大学生に対して、彼らの考えるボランティア観について調べた過去の研究について、ここで簡潔に紹介しておきたい。

この調査は、青森県内のA高等学校の生徒（29名）とB高等学校の生徒（69名）と、青森県内のC大学の2008年度の2年生（46名）と2009年度の2年生（57名）を対象に、A5サイズの白紙を配布し、彼らの考え

るボランティア観について自由記述してもらったものである。そして、記述が「自発性・無償性・公益性」を想起させる場合、「古典的」ボランティア観として分類し、記述が「市民・変革・新たな」を想起させる場合、「市民的」ボランティア観として分類したものである。

この調査の結果は、2つの高校生の場合、古典的ボランティア観を示すキーワードのみで、市民的ボランティア観を示すものはほぼ皆無となった（わずかに2名の生徒が「現状を変える」「自分自身が変われる」と「変革」を想起するキーワードを挙げていた）。大学生の場合も、回答数の傾向においては、高校生の記述と大きな差異はなかった（表1）。

ただ、大学生の記述の場合、古典的ボランティア観を示すキーワードを記載しつつも、同時に社会へのつながりを意識させる表現が散見することが挙げられた。以下に、紹介する。

- ・活動者自身の意思に基づいて行われる社会貢献活動であるとする
- ・地域社会の発展・向上のためにも重要なことである。
- ・地域を支えるものとして重要なものの一つに挙げられる
- ・ボランティアは、社会において重要な社会資源の一つだと思う。

（C 大学生の記述より）

ここには、ボランティアを社会との関わり、社会との位置づけで捉えようとする視点がいかにも見られる。このような違いがみられた理由として以下のように考えられる。

これらの記述をした学生たちは1年次に地域福祉論を履修している。これまでの社会福祉では、低所得者、児童、障害者、高齢者のように対象となる人々をいわば独立した別個のグループとして扱ってきた感がある。それに対して、近年はそれぞれ行政の別々の担当部署の対象

表1 ボランティア観（単位：名）

キーワード	A 高校	B 高校	2008 年度生	2009 年度生
自発性	9	16	2	25
無償性	18	36	22	27
公益性	29	67	37	49
市民・変革・新たな	0	2	1	2
他	0	0	1	2
合計	29	69	43	53

注：複数のキーワードを記述している場合があるので、合計は総数に一致しない。  
（出所）千葉たか子（2009）<sup>13)</sup> の p.210, p.211 を基に筆者作成

であった人々を総括的にあるいは包括的に捉えようとする動きに変わっている。例えば、障害者を対象にした領域では、ノーマライゼーションやインテグレーションの理念が取り入れられ、誰もが共存して暮らせる地域社会づくりへとパラダイム転換が進んでいる。その際、ボランティアは、重要なキーパーソンとして位置づけられている。大学生達がボランティアを社会との関わりから捉えている背景にはこの科目を学習した結果が反映されているのだろう。さらに、これらの学生は、1年次に授業の一環としてボランティア活動を体験したり、ボランティアについても一部学習したりしているため、ボランティアについては、高校生より一層身近なものとして捉えていると考えられる。このことは、記述全般が充実している印象からもいえるだろう。

以上の結果をもとに考察すると、協力してくれた高校生と大学生にみる限り、若い世代においてパラダイム転換が起こっているとはいえない。しかし、地域福祉やボランティアについての学習を重ねた学生の記述と高校生の記述の違いに着目するならば、ボランティア観の形成に、ボランティア学習の実施が一因となっていることがいえ、パラダイム転換はかなり遠い未来のことと悲観的になる必要もないと考えられる。

## 第2章 大学生がもつ「市民」のイメージ

本章では、大学生がどのような市民観を持っているかを明らかにするために、「市民」ということばに対してどのようなイメージ11をもっているのか書いてもらった記述をもとに考察する。

### 第1節 大学生がもつ「市民」のイメージ

#### 1. 調査の概略

##### 1-1 対象

調査の記述を依頼したのは、青森県内のC大学の健康科学部社会福祉学科に所属する2008年度の2年生である。この日は、出席が42名、回答数が42部であったので、回収率は100%となる。

なお、これらの学生は、第3節の先行研究の対象となった学生達である。先行研究の調査日は2008年4月17日で、2回目の授業の際であった。また、これらの学生の状況については第1章第3節で記述した通りである。

##### 1-2 記述依頼の実施状況

調査は講義（前期科目）の時間を利用し、彼らが考える「市民」の定義・概念を自由記述してもらった。実施日は、2008年5月1日で、4回目の授業時であった。A4サイズの紙を半分に切り、A5サイズとし、その白紙を個人に1枚ずつ配布した。次に「あなたが考える「市民」の定義・概念を書いてください」と板書し、無

記名とし、書いてもらった。学生が書き終わった頃合いを見計らって回収した。

この質問は、学生が「市民」という定義・概念をどのようにあるいはどの程度理解しているのかを把握し、次の授業の参考にすることが主目的で行ったものである。

#### 1-3 倫理的配慮

大学生に記述を依頼した時に、書きたくない人は書かない自由があること、記述は後日研究の資料とする可能性があることを告げている。書き終わったら、各自、筆者へ手渡しするようにしているので、提出をもって趣旨は理解され同意したものとみなした。

また、本稿の記述にあたっては、個人の特定につながる情報は一切排除している。

### 2. 調査の結果

自由記述であったため、回答は多様であった。そこで、便宜的に記述の内容をもっていくつかの種類に分類した。回答数が多い順にあげると以下ようになる。なお、各定義の回答例は、記述のままである。

定義1) 市に住んでいるから市民（回答数は21）

〈回答例〉

- ・市民とは、ある特定の地域に暮らす人々の集団のこと。青森市に住んでいる人なら青森市民。
- ・市民とは、ある市に住んでいる者。
- ・とある市に住み、その市に住民票をおいている人のことだと思う。
- ・市に住んでいる人々。青森市民、八戸市民とか

定義2) 地域共同体の一員（回答数は12）

〈回答例〉

- ・市民とは、同じ地域に住み、地域活動を共有する人々である。
- ・市民とは、同じ地域（例えば市町村）で生活する人々のことではないだろうか。また同じ地域に住んで、互いに生活を支え合っている人々。
- ・市民とはその地域に住む人。または地域の活動に参加している人。

定義3) 役割を担う（回答数は3）

〈回答例〉

- ・社会の一員として役割を担っている個人のことである。
- ・国民として、県民として、市民としての役割を担っている人々をさす。
- ・社会の担い手。

定義4) 権利を持つ（回答数は3）

〈回答例〉

- ・地域、行事、活動への参加権利を有する人々。

- ・社会を構成する一員としての権利を持っている人。
- ・地域活動に参加する権利のある人。

その他) (回答数は3)

〈回答例〉 (これらの記述について、以降、考察するので、記号を付する)

- a) 市民とは、この世に生きるすべての人々。国籍、人種、性別、年齢、価値観など問わず、この世の生きる人々。責任も自由も持つ。何を考え、何を表現するか、どのように生きるかも、自らの考えで自由に選択し行動できる人々。
- b) 市民=国民=自分たち  
市民は市民権を持っている。市民として行動・思想・財産の自由が保障され、政治に参加できる権利を持っている。
- c) 一般の国民のことではないかと思う。行政の立場ではない人間のことだと思うが、たとえ行政職についていても職の内容とは関係のない時間・場所においては市民だと思う。

以上、学生の回答状況を、上記の定義にしたがって、分類した(表2)。なお、複数回答とみなされる回答はなかった。

表2 大学生の「市民」の定義・概念

定義	回答数
定義1 市に住んでいるから市民	21
定義2 地域共同の一員	12
定義3 役割を担う	3
定義4 権利を持つ	3
その他	3
計	42

出所：筆者作成

調査：2008年5月1日

### 3. 結果の考察

調査の結果は、多くの検討すべき課題を含んでいる。

#### 3-1 社会学の定義・概念との対照

大学生の「市民」の定義・概念の記述には、前述した社会学辞典の定義・概念に合致するものはなかった。

「市民」が、古代ギリシアですでに現れていること、「市民」の一つの意味が近代産業社会における資本家(ブルジョワジー)を示すことは、高校時代に世界史や公民の授業で学ぶので何人かは書くかと考えていたが、これらへ言及したものはまったくなかった。その理由を推測すれば、既に忘れてしまった、社会福祉領域におけるボランティアの学習と世界史での学習は異なった範疇のもの

として理解し、敷衍的に考えることには及ばなかった、あるいは、現時点で考えたので書かなかった、などが挙げられるだろう。

今日的な意味でのボランティアを考えているので、古典的な意味には触れないという考えもあるが、なおやはり市民を考える場合、近代国家を視野に入れて理解されるのが望ましいのではないか。

#### 3-2 国語辞典の定義・概念との対照

社会学の定義・概念と重なるものがなかったので、次に、簡便な国語辞典(西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫2000)と対照させてみた。そこには、「市民」の意味として、以下の3つがあげられている。

- ①市の住民。
- ②国家への義務、政治的権利を有する国民、公民。
- ③近代史で、前代の貴族・僧侶に代わって政治的権力を得た階級。ブルジョワ。

(西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫2000:519)<sup>12)</sup>

この記述に対照させると、定義1は①の意味に合致する。ただ、この意味では、青森市・八戸市など市に住んでいる人々は市民になれるが、大鰐町・七戸町・南郷村など町や村に住んでいる人々は永久に市民になれない。

定義2は、①、②、③のどの意味にも合致しない。あえて、どこかに分類するならば、①となろうか。

定義3では、市民は地域や社会における役割を持ち、その役割を果たすことが期待されている。役割には、義務と権利が同時に付随してくると考えるならば、②の意味と近くなる。しかし、②には国家という構造・システムの中に位置づけられた人々を意味し、この意味で定義3を、国家を意識した記述とよむことは難しい。

定義4も定義2や定義3と同様で、権利ということだけが使われているものの、それは対国家における権利ではなく、地域社会における権利である。

まとめると、定義2、定義3、定義4は、地域社会あるいは地域共同のレベルでの位置づけであり、対国家という位置づけではない。その点で、①、②、③のどの意味にも適合しないと考える。

「その他」に分類された3つの記述についてみておきたい。これらの記述は、①、②、③のどの意味とも合致しない。ただ、記述b)の、「市民権をもち、行動・思想・財産の自由が保障され、政治に参加できる権利を持つ」とする考え方は、②の国民のイメージに近いといえるだろう。

最後に、調査の定義2、定義3、定義4についてまとめて考えてみたい。定義2、定義3、定義4は、異なるキー

ワードで類型化したため、それぞれ異なったグループに分けられた。しかし、これらの3つの定義を、「地域社会あるいは地域共同体」を視野において理解するならば、同義であるともいえる。地域社会の活動に参加する権利と、支え合う担い手としての役割（「義務」と同義と捉えることができる）をもつ存在としての市民観が示されており、回答数の約半分にあたる。これは、「地域社会」と「担う」ということばに敏感に反応しているとみることができる。ただ、地域社会を考えるなら、市民よりむしろ住民という方が適切であり、市民と住民の区別をどのように捉えているのか明らかではない。

かつて、地域社会は「つくる」ものではなく「あった」ものであった。それが意識的に築くものになってきた。その視点は適切であろう。ただ、その地域社会を再構築する存在として市民を位置づけることについては、さらなる検討を要するだろう。地域社会の構築にあたっては、制度・政策との関わりを考慮することは不可欠であるし、経済的裏づけも必要となる。これらを持っているのが、国レベルでも地方自治体レベルでも行政である。行政との関わりに言及せずに、地域社会の構築を考えることはできない。

### 3-3 本稿における「市民」の定義・概念との対照

本稿では、「市民」を、社会にある課題を「自分の問題」として捉え（身にしみる）、自分に出来ることは何かを自分の頭で考え（考える主体）、「行動する主体」として提示した。今回の記述調査では、この定義・概念と明瞭に重なるものはなかった。

ただ、「その他」の定義を再吟味すると、a) と b) の2つの記述に本稿の定義・概念に近い印象を持つ。a) は、市民を「この世に生きる全ての人々」と普遍的に捉えようとしている。また、「自由と責任をもつ」「自分の考えで行動する」と自立した主体的存在をイメージしている。b) もまた、「政治に参加できる」という部分を、今日的な市民のイメージに近いと解釈することも可能である。3つ目の記述 c) の市民を行政の立場の人間と区別している点に着目したい。「職の内容とは関係のない時間・場所においては市民」という。この捉え方は、個人の社会における役割を単一とみなさず、人はいくつかの生活の場を生きていることを示している。そのような視点は、市民のイメージに近いといえよう。

この記述調査に費やした時間は約10分と短時間であったため、学生が十分に思考を練るには時間不足であった可能性も否定できないだろう。

### まとめと課題

ボランティアは、この10年余りの間に急激に拡大し、

「市民権」を得てきた。しかし、ボランティアは、「個人発の美しい行為」とされる段階にまだ留まり、「新しい市民社会」づくりの鍵とする社会的な位置づけには至っていない。ボランティアを、「個人発の美しい行為」と矮小化した視点は、高校生や大学生のような若い世代でも同様である。その理由の一つとして、若い世代が市民について十分に理解できていないことが本研究で明らかにされたといえる。さらに言えば、市民として育成されていないともいえよう。

今回の記述調査は、大学生の持つ市民の定義・概念について把握しようとしたもので、「地域社会を再構築する人々」というイメージを持っていることは明らかになったが、同時に地域社会を考える際のおおもとにある行政主体の国家が視野に入っていないことも示された。自分たちの暮らす世界（もっといえば狭隘な周囲あるいは環境）に限定された中から抽出されたイメージという印象が濃い。

「新しい市民社会」づくりは、単に地域再生・地域力の回復ではない。「昔に戻す」ことでもない。「新しい容れ物には新しいものが入る」「新しい市民社会」の人々は、単に「そこに住んでいる」だけではなく、その地域をより住みやすいものとするための課題を発見し、解決の道を探り、そのために行動する人々であろう。

社会の問題を理解するためには、自己のおかれた状況を相対化しなければならない。そのためには、学習してきた学際的な知識を総動員し、周囲・環境への観察を鋭くし、自己の思考を巡らす必要がある。知識が、授業の知識段階に留まり、思考の中に定着していかないならば、自立的で主体的な個人への道は遠いと言わざるを得ないだろう。

〔受理日：平成22年8月5日〕

### 〈注〉

- 1 「ボランティア」ということばは、「ボランティアという行為」そのものと「ボランティアを行なう人」の両方の意味でつかわれる。本稿では、煩雑さを防ぐために、特に必要と考えられる場合を除き「ボランティア」と表記している。
- 2 「古典的」とは「古い、有効性・有用性を失った」という意味ではなく、あくまでも「オーソドックス」という意味で使用している。
- 3 「ボランティア教育」には、学習者にボランティア活動を実践させるボランティア教育と、学校教育現場に例えば地域の人がボランティアとして入り、学習活動に参加をするという2通りの意味がある。ここでは、前者の意味で使っている。
- 4 関嘉寛（2001）は、「ボランティアによって支えられ



- ている市民活動」とし、①事例報告、②技術論、③実態調査、④未来像・提言の4つの領域に分類している(2001:213-214)。
- 5 ボランティアを論じる際、「市民」の語彙を使っている例はそれなりにある。例えば、関嘉寛(2001)は、その論考でボランティアについて社会的に論じるとするが、「市民」とは誰を指すのか、という点においては曖昧なまま残している。
- 6 「平等・公平・公正」これらの言葉の定義・概念は、厳密な議論を要する。ただ、本稿の場合、紙面の制限もあり次の機会に回したい。
- 7 これらの研究者たちは、社会福祉の領域の専門家ではなく、むしろ社会学の領域を専門とする。この違いがボランティアに対する見方の差異に繋がっていることも考えられる。この点については、本稿の論点から離れるので、機会があれば別途論じたい。
- 8 「定義」と「概念」は異なるものである。ただ、本研究では大学生の記述をもとに論述しており、大学生はこれら2語を厳密に区別し理解し使い分けていないと考えられる。そこで、本稿ではこれら2語を区別せず、「定義・概念」と並列して使用するものとする。
- 9 フェミニズム研究は、フランス革命が近代のジェンダー構造の基礎を造ったことを明らかにしている(武藤健一2003)。上野千鶴子も、フランス革命における「市民権」について緻密な議論をし、ジェンダーの視点からフランス革命を「市民革命」とみることに異論を述べている(2006:3-46)。
- 10 小田実(1940-1997)思想家、市民運動家、小説家。
- 11 「イメージ」と「定義や概念」は、本来異なる語彙である。ただ、学生全般の様子が、個々の語彙を十分に理解しているような感觸を得なかったので、記述を依頼した際は、厳密な区別をせずに「イメージ、定義、概念」をほぼ同義として理解して構わないことを前提とした。

## 引用文献

- 1) 徳久 球雄：人の生き方としてのボランティア .16, 嵯峨野書院,1997.
- 2) 田尾 雅夫：ボランティアを支える思想 超高齢者社会とボランティアリズム .25, アルヒーフ,2001.
- 3) 金子 郁容：岩波新書 235 ボランティア もうひとつの情報社会 .72, 岩波書店,1992.
- 4) 中村 尚司：岩波新書 360 人びとのアジア - 民際学の視座から - .173, 岩波書店,1994.
- 5) 田中 義久：市民 . 見田壮介・栗原彬・田中義久編, 社会学事典,384, 弘文堂,1994.

- 6) 厚東 洋輔：市民 . 森岡清美・塩原勉・本間康平編, 新社会学辞典,586, 有斐閣,1993.
- 7) 小田 実：「ベ平連」・回顧録でない回顧 .9, 第三書館,1995.
- 8) 小田 実：ベトナムの影 .3, 中央公論社,1974.
- 9) 小田 実：同上 .226.
- 10) 小田 実：「政治」の原理「運動」の原理 .131-136, 講談社,1978.
- 11) 小田 実：「ベ平連」・回顧録でない回顧 .7-18, 朝日新聞社,1995.
- 12) 西尾 実・岩淵悦太郎・水谷静夫編：岩波 国語辞典 第6版 .519, 岩波書店,2000.
- 13) 千葉たか子：パラダイム転換は可能か - 青少年の意識にみるボランティア観 - . 青森県立保健大学雑誌 10 (2) ,205-216; 210,211,2009.

## 参考文献

- 入江 幸男：ボランティアの思想 - 市民的公共性の担い手としてのボランティア - . 内海成治・入江幸男・水野義之編：ボランティア学を学ぶ人のために . 4-21, 世界思想社,1999.
- 上野千鶴子：女という快楽 . 勁草書房,1986.
- 上野千鶴子：生き延びるための思想 .3-46, 岩波書店,2006.
- 遠藤 克弥：ボランティアと教育 . 遠藤克弥編：現代国際ボランティア教育論 . 勉誠出版,2004.
- 金子 郁容：岩波新書 235 ボランティア もうひとつの情報社会 . 岩波書店,1992.
- 佐藤 慶幸：早稲田社会学ブックレット 現代社会学のトピックス 2 人間社会回復のために - 現代市民社会論 . 学文社,2008.
- 佐野 章二：変革期の行政とボランティア . 内海成治・入江幸男・水野義之編：ボランティア学を学ぶ人のために . 58-74, 世界思想社,1999.
- 関 嘉寛：現代市民活動とボランティア - 社会的考察 . 内海成治編：ボランティア学のおすすめ . 212-237, 昭和堂,2001.
- 千葉たか子：パラダイム転換は可能か - 青少年の意識にみるボランティア観 - . 青森県立保健大学雑誌 10 (2) ,205-216,2009.
- 富永 健一：近代化の理論 近代化における西洋と東洋 . 講談社,1996.
- 中野 敏男：ボランティア動員型市民社会論の陥穽 . 現代思想 .27 (5) ,72-93, 青土社,1999.
- 中村 尚司：岩波新書 360 人びとのアジア - 民際学の視座から - . 岩波書店,1994.
- 橋本 健二：貧困連鎖 拡大する格差とアンダークラス

- の出現. 57-59, 大和書房,2009.
- 橋本 健二：新しい階級社会 新しい階級闘争 「格差」  
ですまされない現実.光文社,2007.
- 橋本 健二：階級社会日本.青木書店,2001.
- 見田 宗介：岩波新書 465 現代社会の理論 -情報化・  
消費化社会の現在と未来-. 岩波書店,1996.
- 武藤 健一：フランス革命とその影響.奥田暁子・秋山  
洋子・支倉寿子編：概説 フェミニズム思  
想史. 70-86,ミネルヴァ書房,2003.
- 湯浅 誠：反貧国-「すべり台社会」からの脱出.岩  
波書店,2008.
- 吉村 恭二：ボランティアの世界 私が変わる 社会が  
変わる.築地書館,1999.